

二〇二二年度

上宮学園中学校入学考査問題（一次入試一般学力午前）

国語

（注意）

- （１）この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- （２）問題は「一」から「三」まであります。試験時間は五十分です。
- （３）解答用紙は別に一枚あります。
- （４）解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- （５）「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」の家のとなりに住む由樹は、小学生ながら小説『猫の国』で賞をとって作家としてデビューしていた。「わたし」はある日、ネット上で『猫の国』についてひどい感想が多数書かれていることを発見する。

その日の夜、わたしは自分の部屋で、ひとり机に向かっていた。目の前には、『猫の国』がある。人と深く関わらなければ、きっと傷つくことはない。

けどわたしはやっぱり、人が傷ついているのに、見て見ぬふりをするのは嫌だ。人から嫌われるのは怖いけれど——それでも、わたしは。

A 表紙を見つめたまま、由樹くんのことを考える。

由樹くんが本当に、小説を書くのが嫌になったのなら、もう何も言わないでそっとしておいてあげるのがいいと思う。【ア】

由樹くんはヘンシユウの酒井さんに会ったとき、「書きたくない」じゃなくて「書けない」んだと言っていた。それは、由樹くんが本当は書きたいと思っているから、出た言葉なんじゃないかと思う。

もしかしたら、こんなのはこじつけで、たんにわたしがそう思いたいだけなのかもしれない。

迷う気持ちはある。それでも、迷いを押し殺して、わたしはペンを取った。

便箋を持っていなかったから、代わりに新品のノートを開いて、『猫の国』を読んで感じたことや考えたこと、好きだと思ったところを書いていく。

『猫の国』の主人公は、繊細でひねくれている、自分のことが嫌いな小学五年生の男の子だ。

ある日、人の言葉を話す野良猫に会って、猫だけが暮らす、猫の国へ迷い込む。そこでたくさんのお出会いと冒険を経て、最後には少し成長

した姿でもとの世界へ戻ってくるのだ。『イ』

主人公の感じたことや、出てくる猫たちの言葉に、わたしは何度も共感した。主人公といっしょに笑ったり、怒ったり、時には泣いたりもした。『猫の国』を読んでいるときだけは、とにかく楽しくて、学校での嫌なことはみんな、忘れられた。

わたしは『猫の国』に——由樹くんの本に、たくさんスクってもらった。それは、だれがなんと言っても変わらない事実だ。

だから、その気持ちを伝えたいと思ったし、ほんの少しでも由樹くんの手伝いになればと思った。

由樹くんを傷つける言葉が百あるなら、わたしはその何倍も、好きだという気持ちを伝えたい。

今まで抑えていたぶん、伝えたい言葉は次から次へとあふれて、結局書き終わるのに三日もかかってしまった。ノートは丸々一冊、『猫の国』の感想で埋まった。

書き終えたヨクジツは日曜日。由樹くんがたんぽぽ書店の手伝いに来てくれる日で、わたしはノートを持って由樹くんを待った。

「芝原さん、おはよう。」

開店時間の少し前、由樹くんがお店に現れた。

「お、おはよう……!」

勢いよく立ち上がって言うと、由樹くんは少し驚いた顔をする。

……もっとさりげなく、自然な感じで渡すつもりだったのに。

今朝からずっと、頭の中でしていたシミュレーションが粉々に砕けていくのを感じながら、それでも由樹くんのそばへと歩いていく。

一步一步、由樹くんに近づいたときにシンゾウの音が大きくなるのを感じていた。ノートを握りしめた手に汗がにじむ。

これを見せることで、由樹くんに嫌な想いをさせてしまったら……由樹くんに嫌われてしまったら、どうしよう。

怖くて、足がすくみそうになって、そのたびに三日前の決意を思い出した。

「あの……これ。」

小さく息を吸って、由樹くんにノートを差し出す。緊張で手が少し震えてしまっていた。
よけいなお世話かもしれない。的外れなことをしているのかも。

不安で逃げ出したくなるのを、必死でこらえて口を開く。

「『猫の国』のわたしの感想、書いたの。よかったら読んでほしくて……。」

由樹くんの顔を見ていられなくて、うつむいたまま話す。

少しして、由樹くんの手がノートを受け取った。

「……今、読んでもいい？」

「う、うん。」

うなずくと、由樹くんは

C

ノートを開いて、文字を目で追い始めた。その様子を、

X

見守る。

あの言葉、やっぱり変えたほうがよかったかな。逆にあっちは、変えないほうがよかったかもしれない。

今さら書いた文章を変えることもできないのに、^④由樹くんはどう思われるか不安で、後悔が押し寄せてくる。

自分の考えを人に伝えるのって、すごく怖いことなんだな。[ウ]

——もしかすると、小説を書いて人に見せるのも、こんなふうに怖いことなのかもしれない。

「…………ふっ。」

ノートの四分の一くらいまで読み終わったところで、由樹くんが小さく笑った。それから、糸が切れたみたいに声をあげて笑いだす。

「ははっ、あはははは！」

「え、あの、由樹くん……?」

そんなに笑えるようなことは、書いた覚えがないのだけけど。

不安になって、うかがうように由樹くんを見る。

「ごめん、だってすごい量で……！ 開店時間までに読み終わらないよ。」

……たしかに、冷静になって考えると、ノート一冊分は書きすぎだったかもしれない。〔五〕
顔が熱くなってきて、わたしは両手で頬ほおを押さえた。

「ここまで読んで、まだ前半の感想しかないし。あははっ！ すごい、最後のページまで書いてある……。」

由樹くんが笑いながら、少しうつむく。
D 唇くちびるを引き結んだかと思うと、由樹くんの目から涙なみだがあふれてきた。

「由樹くん……。」

「……ありがとう。」

小さな声で言っ、由樹くんは頬をぬぐう。けれど、涙はどんどんあふれて止まらなくて、開いたままのノートにいくつもシミをつくった。
その姿を見ていると、わたしのまぶたも熱くなってくる。

「わたしのほうこそ、ずっとお礼が言いたかったの。」

こぼれた涙を手の甲こうで拭ふいて、由樹くんを見る。

「わたし、小学生のときにつらいことがあって、由樹くんの小説にたくさん助けもらったの。だから……ありがとう。」

わたしの言葉に、由樹くんが泣きながら笑う。

由樹くんとは、これまでたくさん話をしてきたけれど、
⑥ わたしは今、はじめてちゃんと会話ができた気がした。

（市宮 早記『ようこそ！たんぼぼ書店へ』による）

問1 A D に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。（一語一回に限ります。）

ア くしゃっと イ ちよっと ウ きゅっと

エ じっと オ そっと カ しらっと

問2 — 線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問3 — 線部①「迷いを押し殺して」とありますが、どういふことですか。その内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記

号で答えなさい。

ア 由樹くんが傷ついていることに気づいたが自分は見て見ぬふりをしたほうがよいと考えたこと。

イ ネット上にいる人々よりも由樹くんに上手にアドバイスができるかどうかが不安だということ。

ウ 由樹くんは小説が「書けない」のではなく「書きたくない」のだというのを理解してあげること。

エ 由樹くんのことをそっとしておいてあげるべきかどうかをあえて考えないようにすること。

問4 — 線部②「いる」と同じ働きのものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 室内にいるときははだした。 イ ぼくの祖父母は東京にいる。

ウ 朝からずっと雨が降っている。 エ チームをひきいる責任を感じる。

問5 — 線部③「三日前の決意」とありますが、どのような決意ですか。それを説明した次の文の 1 2 に入る言葉を答

えなさい。ただし、 1 は九字、 2 は六字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

『猫の国』についてだれがなんと言おうと自分は 1 を伝えることで、少しでも 2 になろうという決意。

問6 X に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア あいづちを打って かたず イ 固唾をのんで

ウ 目を白黒させて エ 色を失って

問7 — 線部④「由樹くんにどう思われるか不安」とありますが、わたしはどのようなことを気にしているのですか。それが述べられている部分を文中からひと続きの二文で探し、最初と最後の五字ずつをぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)

問8 — 線部⑤「由樹くんの目から涙があふれてきた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ノートに書かれた文章の長さに驚き、開店前までに読むのはおぼろしく、申し訳ないと思ったから。
イ 思いつくままに書かれたノートの内容は、読み進めるうちにつじつまが合わない部分も多くあきれたから。
ウ これまで気づいていなかった「わたし」の文章を書く才能にとっても感動し、うれしくなったから。
エ 「わたし」が自分に伝えようとしている思いに触れたことで、温かい感情がこみ上げてきたから。

問9 — 線部⑥「わたしは今、はじめてちゃんと会話ができた気がした」とありますが、「わたし」がそう思った理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア これまではじつくりと二人で話をする時間がなかったが、ようやく落ち着いて話し合うことができたから。
イ 由樹くんはずっと「わたし」をさけていたが、はじめて由樹くんからやさしい言葉をかけられたから。
ウ 自分の気持ちをきちんと伝えることができ、はじめて由樹くんと本当に気持ちが通じ合えたと感じたから。
エ 「わたし」がひみつにしていたことを正直にうちあけたことで、由樹くんも本当のことを話してくれたから。

問10 次の一文は、文中の「ア」も「エ」のどこに入りますか。一つ選んで、記号で答えなさい。

だけど、わたしにはそうは思えなかった。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「里山」という言葉。一般の人に認知されたのは比較的新しいようです。私が大学二年生のときに買った^注広辞苑（一九七〇年版）には、まだ載っていません。

人々と自然の間に、節度を保った関わり方が維持されている限りにおいて、日本の農村地帯の好ましい環境を象徴する言葉だと、私は思っています。人が行き来し耕作を持続している田畑のまわりには、里山と呼ぶにふさわしいおだやかな風景があります。^①その全体風景の中には、当然川や池も含まれていると私は考えます。

雑木林の中を細い谷川が流れ、林が切れると、狭い段々畑や棚田が連なってふもとの人家へ迫ります。^②谷川は小川となって、田畑からそれほど離れずに流れ下っていきます。田畑の脇には小さな溜め池もあります。谷川や溜め池では魚や昆虫たちが、そして水を張った棚田でも生き物たちが生を全うするために、命の営みを闘わせています。

やがて小川はしだいに幅広くなり水量も増えて、両脇の田んぼにたっぷり水を与えながら、より多くの実りをもたらす水田を増やしていきます。そこからたらされるものは、農作物の実りだけではありません。水に支えられた多種多彩な生物が、実りの秋までの短い時間に複合的に発する生のエネルギーによって、刻々と変化する自然の美を創り出していきます。

A

夏の夕暮れどきに、水田が広がる風景を眺めていると、刻々と変化していく自然美に圧倒されるようなときがあります。水田や隣接する山々の緑が、変化する風と光に呼応するかのようになり、異なる表情を瞬時に次々と創り出す様子は、里山ドクトクの風景美といえるのだらうと思います。

力強く見えたかと思うと、突然たおやかにも見えるその美しさは、手入れがいき届き生き生きと広がる緑田の下に張られた水に存在する無数の生命力が、懸命に支えているのだと思えてなりません。

B

耕作を放棄したり、また近くに人が住まなくなったりしたとたんに、景色の美しさは色あせ、里山とは呼べない風景に変わっていきます。人々が自然に対して、協調性を維持しながら前向きに関与することをやめてしまうと、里山から荒れ野へ逆戻りしていくスピード

は速いようです。

そこにある生物は、まず植物が生存本能をむき出しにして、勢力アラソいに明け暮れるように見えます。一年もすれば、どこからやって来たのか、繁殖力の強い植物が注 跋扈し始めます。いったん放置してしまうと、人々が関与していたときほどのXと

元は水田であったところも、人が水を供給し続け、余分な雑草を排除してやらない限り、里山に見られるような水生動物の棲みよい環境にはなれないのです。水はけの悪い草地になるか、乾いた荒地となって、水生動物を排除してしまえます。

私のふるさとは、③ 里山という言葉にふさわしかった風景が、わずか三、四十年の間に山裾に近い周辺部からしだいに消滅し、荒れ野に変わってきているところがあります。出張のときに電車のマドから眺めた九州各地の農村にも④ 同様な光景が増えてきたように思えます。強い植物がはびこり、かつて見慣れた調和美とは程遠い景色が出現しているのです。小川も荒れ、魚たちがどれほど生き残っているのか、疑問に思えます。

人々が放置してから、開墾を始める前の、文字通りの原野のような天然の自然状態に戻るまでには、⑤ 気の遠くなるような長い期間は、放置され無軌道に荒れ果てた山でしよう。人々が原野を開拓し続け、調和のとれた里山という環境になるまでに、⑤ 気の遠くなるような長い期間は、放置され無軌道に荒れ果てた山

はるか遠い将来においては、豊かな天然の環境が復活する可能性があるとしても、それまでの長い期間、⑤ 放置され無軌道に荒れ果てた山林やかたて田畑であった荒地が、踏みとどまって耕作を持続しようとする人々の暮らしに、⑤ しっぺ返しをするような気がしてなりません。

私のふるさとも、竹などの植物がかつての限定域を超えて急速に勢力をカクダイし、使っている農作地までも⑤ 侵奪していく光景は珍しくありません。植生が乱れた山肌はもろく弱くなり、大雨に耐えられなくなって各地でずり落ち地肌をさらけ出すようです。

C 山林域の保水力が落ちてしまった結果、川は、晴天が続くとすぐに干上がり、大雨が降るとたちまち増水して一気に流れ下るようになります。そうになると川と田畑の間にかつてはあった良好な関係が維持できなくなり、農作を営む人々は水の確保に苦勞を強いられることになります。

農村を受け継ぐ人々が減り、せめて平坦地へいたんちの広く使いやすい農耕地だけを守ろうとしても、そう単純にうまくはいかなくなるのです。日本のような平野部の少ない国土においての水田耕作は、周辺の山間部までも絶えず意識し管理しながら営まないと、成り立ちにくいのだと思います。

注 広辞苑……国語辞典の一つ。

跋扈……思うままにのさばること。

侵奪……他人の持っているものや利益を奪うばうこと。

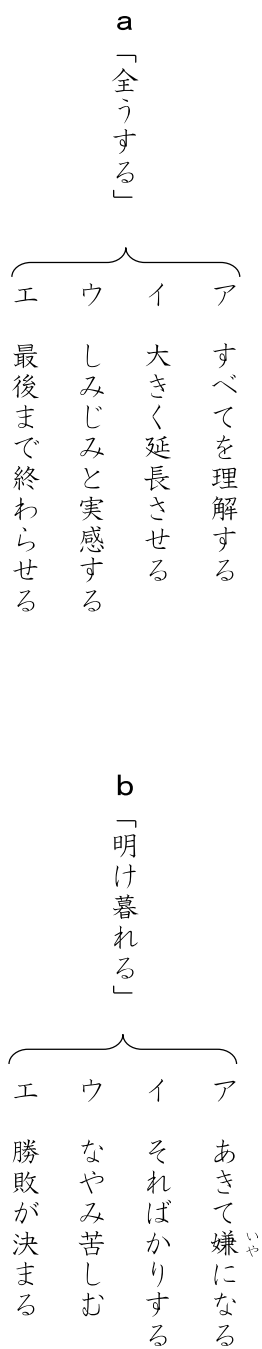
(松尾 政信『記憶スケッチ 川と魚と水の風景―若木の里、過ぎし日の水辺から』による)

問1 ――線部①「その全体風景の中には、当然川や池も含まれていると私は考えます」とありますが、なぜ里山にはそれらの水が大切なのですか。「生命力」という言葉を必ず使って、**四十五字以内で答えなさい。(句読点なども一字に数えます。)**

問2 ――線部②「人家」と同じ成り立ちになっている熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 往復 イ 高価 ウ 国立 エ 入試

問3 ――線部 a「全うする」・ b「明け暮れる」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。



問4 A C に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。（一語一回に限ります。）

ア そして イ しかも ウ あるいは
エ つまり オ ところが カ たとえば

問5 — 線部あゝえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問6 X に入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 動植物の可能性がせばまる イ 動植物の積極性が見られる
ウ 動植物の多様性が保たれる エ 動植物の永続性がこわれる

問7 — 線部③「里山という言葉」とありますが、筆者は「里山」をどのような言葉だと考えていますか。文中から五十五字で探し、最初と最後の五字ずつをぬき出して答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

問8 — 線部④「同様な光景が増えてきた」とありますが、その原因は何ですか。それを説明した次の文の 1 2 に入る言葉を答えなさい。ただし、 1 は十六字、 2 は二字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。（句読点なども一字に

数えます。）

自然に対して 1 することを入々がやめてしまったので、 2 のとれない状態になったこと。

問9 — 線部⑤「しっぺ返し」とありますが、どういうことが起こるのですか。その内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 人間が里山を作ったことによって、動植物たちが生き残れなくなること。
イ 自分のふるさとだと実感できる場所を、人々が失ってしまうということ。
ウ 水の確保に苦勞するようになるなど、農作を営むことが困難になること。
エ 日本社会では、農村を受け継ごうという希望者が少なくなっていること。

二

次の1〜10の（ ）に入る漢字一字を入れ、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 青菜に（ ） ……元気がなくしよげていること。
- 2 井の中のかわず大（ ）を知らず ……自分の周りのせまい世界しか知らないこと。
- 3 （ ）も涙もない ……まったく人情味がないこと。
なみだ
- 4 苦（ ）をかみつぶしたよう ……不愉快ふゆかいそうな顔つきのこと。
- 5 住めば（ ） ……どんな場所であったとしても慣れれば住みごころごころになるといふこと。
- 6 （ ）は熱いうちに打て ……何事も機会を逃のがしてはいけないこと。
- 7 光陰（ ）のごとし ……月日が経たつのは早いということ。
こういん
- 8 （ ）に短したすきに長し ……中途半端ちゅうはんぱで役に立たないこと。
- 9 後ろ（ ）をさされる ……かげで悪口を言われること。
- 10 （ ）ほり葉ほり ……細かい点まで何もかも残さないようにすること。

